

金属部会長便り(2024年3月号)2024年3月1日発行(第32号) 田中和明個人の意見・感想で部会の総意ではありません。

部会長便り第32号

1 直近の活動

- 2月4日(日) 幹事会 (2024年2月)
- 2月11日(日)金属部会CPD技術セミナー11「技術者倫理」
- 2月17日(土)YES-Metals!
- 2月18日(日)「企業内技術士勉強会(11回目)」
- 2月25日(土) 定例部会(2月) 埼玉担当。

2 今後の活動予定(直近1ヶ月分)

- 3月3日(日) 幹事会
- 3月16日(土) YES-Metals!
- 3月17日(日)「企業内技術士勉強会」(第13回目)思考実験2、講義「説明責任」
- 3月20日(火) 顧問会議(顧問+執行役)
- 3月23日(土) 早春見学会「貨幣博物館(貨幣の歴史金属学)その他」
- 3月24日(日) 金属部会定例部会(3月分)
- 3月28日(木) APECIツヅニア審査委員会
- 3月28日(木) 四部会連絡会

3 部会四方山

▶2月は逃げるとはよく言ったもので、あっというまに2月がすぎた。部会活動も、いよいよ今年行事にアクセルがかかりはじめた。▶ところで、65周年記念誌のオンライン配布を始める。みなさんお手数ですが、ここからダウンロードしてほしい。

<https://xgf.nu/eHe5o>

PW: metals65

2024年5月30日期限

5月30日まではダウンロードできる。ダウンロードしたら、できればここから感想をお願いしたい。関係者が総力を挙げてつくりあげた力作である。

<https://forms.office.com/r/zk0CrLcJeM>

▶先日部会長会議があった。これまで、部会長会議は、事務局の話を一方向的に聞くばかりであったが、最近では「モノ言う部会」を皆が心がけている。いろいろな不思議な規制はできるだけ取り払っていくことを申し合わせている。ものいうだけでなく、実行も伴う部会になりたい。▶金属部会で気になっていることがある。それは、参加人数を増やすためにzoomを使って活動しているが、zoom参加があまりにも便利なために、リアル会合が激減してしまったことだ。今年は、地域本部や関東支部からの定例部会発信をとおして、リアルにあつまる機会を増やしたい。ところが、それでは関東地区のコロナ前までのリアルに集まって行っていた金属部会の会合が「皆無」になってしまった。家から出ずに定例

部会に出られ、交通費もかからず、移動時間の浪費も無くなったということかもしれない。しかし、これでは利便性に「技術士同士の出会いの機会」を売り渡したことになるのではなからうか。こういう思いに駆られ出した。▶今年は、機械振興会館から発信する定例会部会は、「ハイブリッド」で行う。まあ、元々そのつもりで設定している。そして**来年はそのハイブリッドもやめ、リアルだけにしていこう**と思う。リアル会合に出られない人は、2回に一度の定例会部会は参加できない「不自由」が出るかもしれない。しかし、機械振興会館での講演はできるだけPE-CPDに録画で掲載する。関東圏の皆さんは、来年の完全リアル会合に備えて今年を移行期間としてハイブリッド会議にリアルでの参加を求める。▶これは**YES-Metals!**も同じで、すでにオンラインからリアル会合の切り替えも部会長からの要請で検討すると言ってくれている。つまり、**YES-Metals!**もコロナ禍で中断してしまっていた会合を金属部会からのZOOM貸与で再開してくれた2022年1月以降のオンライン開催から、**本来の「これから技術士になろうとする人との出会いを重視するYES-Metals!**」のリアル会合への移行を今年中に行ってくれることを期待する。▶人間は、誰でも利便性に慣れるものであり、その利便性が損なわれると不自由と感じる。しかし、その利便性の代償も必ず存在する。部会の定例会部会のリアル会合が増すと、参加できない地域の部会員の皆さんは不自由と感じるかもしれない。しかし、会合数はこの数年で、激増した。セミナーや勉強会などのオンライン会合は続ける。決して、皆さんのCPDの機会を奪ったことにはならないと信じる。必要なら、オンラインセミナーの回数をあと2回増やして失われたCPD時間6時間作っても良い。そうしてでも、「関東圏のリアル会合に出てくる機会が失われている」実態を改善したい。地方本部や県支部所属の皆さんも定例会部会の際に集まってリアル会合を行ってほしい。リアル会合のために必要な部屋代などは部会から補助する方向で検討している。

4 和鐵管見 30 「65周年記念誌発行の趣意書」

▶コロナなんかには負けないぞ！

2018年10月、金属部会の60周年記念誌が発行された。記念誌の発行は、金属部会始めて以来、初めての一大イベントであつたらしい。数年間の準備期間を経て、実際に手元に届いた冊子はそれは立派なものだった。大感激だ。

2018年、2019年と世の中が明るくなっていった。即位の礼が挙行され、ラグビー日本代表が大活躍し、世の中いけいけどんどの上り調子だった。徳島の全国大会で阿波踊りを踊りまくり、翌年の名古屋での再会を誓ったのもこの時期だ。いよいよ来年は待望の東京オリンピックがやってくる。東京の地下鉄のポスターには「1000万人が押し寄せてくる」と浮かれまくっていた。東京はホテルの建設ラッシュだった。

その東京が、たった数ヶ月でゴーストタウンになった。羽田空港はガラガラであった。電車には人は乗っておらず、街は20時になると真っ暗になった。食堂も閉まっている。

2020年の始まりは、前年末の吉武先生のご逝去から始まった。新年会は行われず、ギリギリ2月に有志が集まり偲ぶ会を行ったが、皆が集まれる会合はそこまでだった。定例会部会の開催も2月で途切れた。世の中の雰囲気はどんどん悪くなり、とうとう4月には学校が休

校になった。東京へ通っていた勤め人は、当面出てくるなどの指示が出た。誰もがマスクをして小声で話した。金属部会はこの時期、息を引き取りかけていた。これまでのように、集まらない。連絡の方法もない。金属部会だけではない、この時期、いろんな組織が息を詰まらせていたのだ。誰もが、もう技術士会の活動などできないと思い始めていた。そんな暗い気分を吹き飛ばしてくれたのが、小林前金属部会長の明るさと行動力だった。瀕死状態の部会活動を、自腹でZOOMを契約し、オンライン開催できる準備を整えて行った。困難にあっても、絶望するのではなく、行動を起こす。行動が正解かどうかなど誰にもわからない。黙って疫病が通りすぎるのを待つのではなく、今やれることをやる姿勢は、周囲のものに勇気を与えてくれた。小林部会長のやることについていこう、そういう気にさせてくれた。危機に際し、金属部会の底力を見たような気がした。

▶始めるより続ける方が難しい！

60周年記念誌は、多大な労力をかけて作られた。一大プロジェクトが遂行された。この手の活動で誤解を招きやすいのは、「一度できたんだから、次もできるよね」である。そんなの無理だ。大勢が頑張ったのは、次回も頑張らなければ作れない。一度できたことは既得権のように思い、簡単にできると思いがちである。

では、次はいつ作るのだ。そう考えるとおのずと答えが決まってくる。今作るのだ。10年後の70周年まで待てない。ということで、65周年とした。記念誌の作り方は、ほぼルーティン化されてきた。しかし、いくら簡単であろうが知らないものは作れない。長続きさせるには、組織の中に経験者を担保し続けることが必要だろう。実際に継続するには、作るんだという部会の意思と、部会全員の協力があって初めてできる。何もしなければ存在しなかったこの冊子が存在し、65周年記念大会で配布されること

が吉武先生をはじめとする部会先輩が守ってこられた金属部会がコロナに負けなかった証になる。こう考えてやってきた。本当にそう思ってやってきた。65周年記念誌発起人一同

この数年は、コロナに振り回された過渡期であった。その中で、オンライン会合も普及し、現在もその恩恵を受けている。しかし、**過渡期はあくまで過渡期であり、「金属部会」に集う私たちの目的を忘れてはいけない**と信じている。参加者が多い、参加機会が多いだけが「金属部会」の活動ではないはずだ。もちろん、コロナ以前のようにリアル一辺倒に戻ることはありえない。「金属部会」は、ZOOM時代に見事に適応した。しかしそれがあたかも正しい姿であるように錯覚しているのではなからうか。そういう気持ちである。**現状に満足した瞬間から退化と崩壊が始まる**のではなからうか。部会長田中。